



TITLE:

隋書經籍志序譯注(二)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 川合, 康三

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 隋書經籍志序譯注(二). 中國文學報 1977, 27: 88-120

ISSUE DATE:

1977-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177328>

RIGHT:

隋書經籍志序譯注 (二)

興膳宏
川合康三
京都大學

經部 (1)

易

昔宓戲氏始畫八卦、以通神明之德、以類萬物之情、蓋因而重之、爲六十四卦。及乎三代、實爲三易。夏曰連山、殷曰歸藏、周文王作卦辭、謂之周易。周公又作爻辭、孔子爲彖・象・繫辭・文言・序卦・說卦・雜卦、而子夏爲之傳。

及秦焚書、周易獨以卜筮得存、唯失說卦三篇、後河內女子得之。漢初、傳易者有田何、何授丁寬、寬授田王孫、王孫授沛人施讎・東海孟喜・琅邪梁丘賀。由是有施・孟・梁丘之學。又有東郡京房、自云受易於梁國焦延壽、別爲京氏學。嘗立、後罷。後漢施・孟・梁丘・京氏、凡四家並立、而傳者

甚衆。漢初又有東萊費直傳易、其本皆古字、號曰古文易。以授琅邪王璜、璜授沛人高相、相以授子康及蘭陵毋將永。故有費氏之學、行於人間、而未得立。後漢陳元・鄭衆、皆傳費氏之學。馬融又爲其傳、以授鄭玄。玄作易注、荀爽又作易傳。魏代王肅・王弼、並爲之注。自是費氏大興、高氏遂衰。梁丘・施氏・高氏、亡於西晉。孟氏・京氏、有書無師。梁・陳・鄭玄・王弼二注、列於國學。齊代唯傳鄭義。至隋、王注盛行、鄭學浸微、今殆絕矣。

歸藏、漢初已亡、案晉中經有之、唯載卜筮、不似聖人之旨。以本卦尚存、故取貫於周易之首、以備殷易之缺。

そのかみ宓戲氏ははじめて八卦の圖をかき、それによって造物主のあらたかな力と感應し、全存在物の本性を類別したのでが、そこからさらに重ねあわせて、六十四卦ができたのである。夏・殷・周の時代になると、まさに三種の易があった。夏の易は『連山』といい、殷は『歸藏』といい、周の文王が卦辭を作って、それが『周易』といわれる。周公がさらに「爻辭」を作り、孔子が「彖傳」、「象傳」、

「繫辭傳」、「文言傳」、「序卦傳」、「說卦傳」、「雜卦傳」を作り、そして子夏がそれに解説をつけた。

秦の焚書に際しては、『周易』のみは占いの書物ということで焼却を免れ、そのうちの「説卦」三篇だけが失なわれたが、それは後になって河内かだいの一婦人によって発見された。漢の初め、易の傳承者に田何がいたが、田何は丁寛に傳授し、丁寛は田王孫に傳授し、田王孫は沛の施讎しじゆ、東海の孟喜、琅邪の梁丘賀に傳授した。ここから施氏と孟氏と梁丘氏の學派が生まれた。また東郡の京房という者が、易學を梁國の焦延壽から傳授されたと稱し、獨自に京氏の學派をうちたてた。國學（國立大學）の講座をもったこともあったが、あとになってはずされた。後漢には施氏・孟氏・梁丘氏・京氏の、なべて四系統の學派がみな國學にとりたてられ、その傳承者はなほ多くにのぼった。漢の初めには以上とは別に東萊の費直という者が易學をうけついでいたが、そのテキストはすべて古代文字で書かれていたので、『古文易』と稱した。費直はそれを琅邪の王璜に傳授し、王璜は沛の高相に傳授し、高相は子の高康と蘭陵の

毋將永むしやうえいに傳授した。だから費氏の學というものが、民間に擴まっていたわけだが、國學の科目には採用されなかった。後漢の陳元・鄭衆は、ともに費氏の學の後繼者である。馬融はさらにその注釋を作り、鄭玄に傳授した。鄭玄は『易注』を著わし、また荀爽じゆんそうは『易傳』を書いた。魏の王弼・王弼は、いずれも『古文易』に注を施した。それ以來、費氏の學はいたって盛んとなり、高氏の學の方はすたれていった。梁丘氏・施氏・高氏の學派は、西晉の頃にほろび、孟氏・京氏の學派は、書物はのこったがそれを教授する者がいなくなった。梁・陳には、鄭玄と王弼の二家の注釋が、國學にならびたてられた。北齊の王朝では鄭玄の解釋だけが傳えられていた。隋にはいると、王弼の注がもてはやされ、鄭玄の學問はしだいに下火になって、今ではほとんどたえてしまった。

『歸藏』は、漢の初めの頃すでにほろび、晉の『中經』を調べてみると記載されてはいるが、占いの言葉を記すのみで、聖人のころばせとは思われない。しかし卦のものと形のをのこしているので、『周易』の前につらねて、殷易

の缺落を補うこととする。

- (1) 宓戲氏始畫八卦三句 『易』繫辭下傳に、「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。」「漢書』藝文志（漢志）にも、繫辭傳のこの一段を引用する。
- (2) 因而重之 繫辭下傳に、「八卦成列、象在其中矣、因而重之、交在其中矣」。孔穎達「周易正義序」は、この繫辭傳のことばを引きつつ、その理を次のように敷衍する。「伏羲初畫八卦、萬物之象、皆在其中。故繫辭曰、八卦成列、象在其中矣、是也。雖有萬物之象、其萬物變通之理、猶自未備、故因其八卦而更重之。卦有六爻、遂重爲六十四卦也。繫辭曰、因而重之、交在其中矣、是也」。
- (3) 及乎三代六句 『周禮』春官大卜に、「掌三易之法、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、其別皆六十有四」。鄭注に、「名曰連山、似山出內氣也。歸藏者、萬物莫不歸而藏於其中。杜子春云、連山宓戲、歸藏黃帝」。（戲は音義）『周易正義序』には、また鄭玄の説を引いていう。「鄭玄易贊及易論云、夏曰連山、殷曰歸藏、周曰周易。鄭玄又釋云、連山者、象山之出雲、連連不絕。歸藏者、萬物莫不歸藏於其中。周易者、言易道周普、無所不備」。連山を夏の易、歸藏

を殷の易とするのは、鄭玄の見解に副ったものと思われる。

- (4) 周文王作卦辭 繫辭下傳に、「易之興也、其於中古乎、作易者其有憂患乎」。疏はこれにもとづいて、周易を文王及び周公から起こるとする。また同じく繫辭下傳の「易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪、當文王與紂之事邪」も、文王を易と關係づける根據になっている。『史記』太史公自序には、「昔西伯拘羑里、演周易」とある。
- (5) 周公又作爻辭 「周易正義序」によれば、卦辭・爻辭ともに文王の作とする説と、卦辭を文王の作とし爻辭を周公の作とする説とがあった。前者の立場をとるのが鄭玄の學派、後者の立場をとるのが馬融・陸績の學派であったという。
- (6) 孔子爲彖象繫辭云云 『史記』孔子世家に、「孔子晚而喜易・序彖・繫・象・說卦・文言」。漢志にも、「孔氏爲之彖・象・繫辭・文言・序卦之屬十篇」とある。
- (7) 子夏爲之傳 劉知幾の「孝經老子注易傳義」（『文苑英華』卷七百六十六等引）に、「按漢書藝文志、易有十二家、而無子夏作傳者、至梁阮氏七錄、始有子夏易六卷、或云韓嬰作、或云丁寬作云云」という。明らかに偽託の書である。本志目錄に、「魏文侯師卜子夏傳、殘缺。梁六卷」。
- (8) 及秦焚書二句 漢志に、「及秦燔書、而易爲筮卜之事、傳者不絕」。『漢書』儒林傳にも同趣旨の記述がある。
- (9) 唯失說卦三篇二句 『論衡』正說篇に、「至孝宣皇帝之時、河內女子、發老屋、得逸易禮尚書各一篇奏之。宣帝下示博士、

然後易禮尚書各益一篇、而尚書二十九篇始定矣」とある。ただ、このとき発見された篇が説卦だったとは記されていないが、本田濟氏は、「經籍志の作者は王充の言によって、それを説卦と斷じたのではあるまいか」といわれる。(『周易』平樂寺書店刊、二〇ページ)

(10) 漢初傳易者有田何 『漢書』儒林傳に、「自魯商瞿子木受

易孔子、以授魯橋庇子庸。子庸授江東馯臂子弓、子弓授燕周醜子家、子家授東武孫虞子乘、子乘授齊田何子裝。……漢興、田何以齊田徙杜陵、號杜田生、授東武王同子中、雒陽周王孫、丁寬、齊服生、皆著易傳數篇。……要言易者、本之田何。

(11) 自何授丁寬至而未得立 前漢における易學傳授の歴史は『漢書』儒林傳に詳しいが、隋志のこの一段は『後漢書』儒林傳の文章をほぼそのまま援用しているように思われる。

「前書云、田何傳易授丁寬、丁寬授田王孫、王孫授沛人施讎、東海孟喜、琅邪梁丘賀。由是易有施、孟、梁丘之學。又東郡京房受易於梁國焦延壽、別爲京氏學。又有東萊費直傳易、授琅邪王橫、爲費氏學。本以古字、號古文易。又沛人高相傳易、授子康及蘭陵毋將永、爲高氏學。施、孟、梁丘、京氏四家皆立博士、費、高二家未得立」。

(12) 丁寬 丁寬以下高相に至る人物については、『漢書』儒林傳に傳がある。丁寬、字は子襄、梁の人。田何について學んだ後、洛陽で周王孫からも易の古義を受けた。『易說』三萬言を著わしたという。

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

(13) 田王孫 丁寬と同じ梁郡^{もと}の人ということが『漢書』儒林傳に見えるだけで、詳しい傳は不明。

(14) 施讎 字は長卿。童子のころから田王孫に従って學び、のち博士となる。宣帝の甘露年間には、石渠閣で行なわれた五經の同異の討論に参加した。門下から張禹・彭宣が出ている。

(15) 孟喜 字は長卿。東海蘭陵の人。施讎・梁丘賀とともに田王孫の門下だったが、師法を改めたことから、結局博士に登用されなかった。門下から白光・翟牧が出ている。本志目錄に、孟喜章句の『周易』八巻が見える。

(16) 梁丘賀 字は長翁。琅邪諸の人。はじめ京房から易を受け、のち田王孫に師事した。宣帝の信任を得て、官は少府に至った。のち士孫張・鄧彭祖・衡威の易學がここから出た。

(17) 又有東郡京房三句 京房及びその師焦延壽のことは、『漢書』京房傳ならびに同儒林傳に見える。京房(前七七—前三七)、字は君明、東郡頓丘の人。本姓は李。災異の説を交えた獨特の易學を展開した。儒林傳に、「至成帝時、劉向校書、考易說、以爲諸易家說皆祖田何、楊叔(何)、丁將軍(寬)、大誼略同、唯京氏爲異」。京房は石顯の譴言に遭い誅されたが、門下の殷嘉・姚平・乘弘は、のちともに郎・博士となった。焦延壽は、梁の人、字を贛^{かん}という。京氏易のための先導者的役割を果たした。儒林傳は、延壽の易について、「隱士の説」を得たものかという。本志目錄に、「漢魏郡太守京房章句」の『周易』十巻が著録される。

- (18) 漢初又有東萊費直傳易三句 費直、字は長翁。官位は單父令に至る。儒林傳に、「長於卦筮、亡章句、徒以彖象系辭十篇文言解說上下經」とある。漢志に、「訖于宣元、有施・孟・梁丘・京氏列於學官、而民間有費高二家之說。劉向以中古文易經校施・孟・梁丘經、或脫去『無咎』『悔亡』、唯費氏經與古文同」。本志目錄に、「又有漢單父長費直注周易四卷、亡」。
- (19) 王瓚 字は平中。易とともに、古文『尙書』を傳えた。
- (20) 瓚授沛人高相三句 儒林傳に、「治易與費公同時、其學亦亡章句、專說陰陽災異、自言出於丁將軍。傳至相、相授子康及闕陵毋將永。康以明易爲郎、永至豫章都尉。……繇是易有高氏學。高・費皆未嘗立於學官」。『後漢書』儒林傳にも、王瓚が直接高相に傳授したという記述は見えない。
- (21) 自後漢陳元鄭衆至荀爽又作易傳 『後漢書』儒林傳の、「建武中、范升傳孟氏易、以授楊政、而陳元・鄭衆皆傳費氏易、其後馬融亦爲其傳。融授鄭玄、玄作易注、荀爽又作易傳。自是費氏興、而京氏遂衰」に據ったと思われる。
- (22) 陳元 字は長孫、蒼梧廣信の人。兼ねて『春秋左氏傳』を傳えた。『後漢書』列傳二十六に傳がある。
- (23) 鄭衆 字は仲師。河南開封の人。官は大司農に至る。易とともに、兼ねて『毛詩』・『周禮』・『左傳』を傳えた。『後漢書』列傳二十六に傳がある。
- (24) 馬融 (七九—一六六)、字は季長、扶風茂陵の人。官位は議郎に至る。易の他に、『尙書』・『毛詩』・『禮記』・『論語』等に注した。傳は『後漢書』列傳五十にある。本志目錄に、「梁又有漢南郡太守馬融注周易一卷、亡」。
- (25) 鄭玄 (一二七—二〇〇)、字は康成、北海高密の人。易の他にも、『尙書』・『毛詩』・三禮の注等多くの業績があることはあまりにも有名。『後漢書』列傳二十五に傳がある。
- (26) 玄作易注 本志目錄に、「後漢大司農鄭玄注」の『周易』九卷が著録される。
- (27) 荀爽又作易傳 荀爽 (一二八一—一九〇)、字は慈明、一名を諱という。潁川潁陰の人。官位は司空に至った。『易傳』の他に、『詩傳』・『尙書正經』・『春秋條例』等を著わした。『後漢書』列傳五十二に傳がある。本志目錄に、「漢司空荀爽注」の『周易』十一卷が著録される。
- (28) 王肅 (一九五—二五六)、字は子雍、東海郯の人。官は中領軍・散騎常侍に至り、死後衛將軍を追贈された。諡を景侯という。『魏志』卷十三の本傳に、「初、肅善賈・馬之學、而不好鄭氏、采會同異、爲尙書・詩・論語・三禮・左氏解、及撰定父朗所作易傳、皆列於學官」とある。本志目錄に、「魏衛將軍王肅注」の『周易』十卷が著録される。
- (29) 王弼 (二二六—二四九)、字は輔嗣、山陽高平の人。尙書郎となった。『易』及び『老子』に注し、いずれも後世永く行われていることは周知の通り。『魏志』卷二十八鍾會傳に付傳があり、同注及び『世說新語』文學篇注に何劭の「王弼別傳」を引く。

(30) 自是費氏大興至有書無師 陸德明「經典釋文序錄」は、

この時期の易學について次のように述べている。「後漢費氏興、而高氏遂微。永嘉之亂、施氏・梁丘之易亡、孟・京・費之易、人無傳者。唯鄭康成・王輔嗣所注、行于世。而王氏爲世所重、今以王爲主、其鑿辭已下、王不注、相承以韓康伯注續之、今亦用韓本」。また『宋書』禮志一（また『通典』卷五十三）

に、「太興初、議欲修立學校、唯周易・王氏、尙書鄭氏、古文孔氏、毛詩・周官・禮記・論語・孝經鄭氏、春秋左傳杜氏・服氏、各置博士一人。其儀禮・公羊・穀梁及鄭易、皆省不置博士。太常荀崧上疏曰、……周易一經、有鄭玄注、其書根源、誠可深惜、宜爲鄭易博士一人」。この獻言は採用されたが、たまたま王敦の亂に際會したため實現を見なかったという。

(31) 齊代唯傳鄭義 北齊において鄭玄の易注が盛行したことは、『北齊書』儒林傳にも、「河北講鄭康成所注周易。……河南及青齊之間、儒生多講王輔嗣所注周易、師訓蓋寡」と記されている。また『易』を含めて經學が鄭注に依據するのは、北齊に先んずる北魏でも同様であったこと、『魏書』儒林傳の記述からうかがえる。「漢世鄭玄並爲衆經注解、服虔・何休各有所說。玄・易・書・禮・論語・孝經、虔・左氏春秋、休・公羊傳、大行於河北、王肅易亦間行焉」。『隋書』儒林傳は南北朝の經學を比較して、「江左周易則王輔嗣、尙書則孔安國、左傳則杜元凱。河洛左傳則服子慎、尙書・周易則鄭康成」という。

(32) 案晉中經有之『中經』は、晉の鄭默撰。本稿(一)の(田)注(2)

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

参照。

(33) 以本卦尙存三句 本志目錄の冒頭に、「晉太尉參軍薛貞注」の『歸藏』十三卷が著録されている。

書

書⁽¹⁾之所興、蓋與文字俱起。孔子觀書周室、得虞・夏・商・周四代之典、刪其善者、上自虞、下至周、爲百篇、編而序之。

遭秦滅學、至漢、唯濟南伏生口傳二十八篇。又河內女子⁽⁴⁾得泰誓一篇、獻之。伏生作尙書傳四十一篇、以授同郡張生、張生授千乘歐陽生、歐陽生授同郡兒寬、寬授歐陽生之子、世世傳之、至曾孫歐陽高、謂之尙書歐陽之學。又有夏侯都尉、受業於張生、以授族子始昌、始昌傳族子勝、爲大夏侯之學。勝傳從子建、別爲小夏侯之學。故有歐陽・大小夏侯三家並立。⁽¹⁴⁾訖漢東京、相傳不絕、而歐陽最盛。

⁽¹⁵⁾初漢武帝時、魯恭王壞孔子舊宅、得其未孫惠所藏之書、字皆古文。⁽¹⁷⁾孔安國以今文校之、得二十五篇。其泰誓與河內女子所獻不同。又濟南伏生所誦、有⁽¹⁸⁾五篇相合。安國並依古

文、開其篇第、以隸古字寫之、合成五十八篇。其餘篇簡錯亂、不可復讀、並送之官府。安國又爲五十八篇作傳、會巫蠱事起、不得奏上、私傳其業於都尉朝、朝授膠東庸生、謂之尙書古文之學、而未得立。後漢扶風杜林、傳古文尙書、同郡賈逵爲之作訓、馬融作傳、鄭玄亦爲之注。然其所傳、唯二十九篇、又雜以今文、非孔舊本。自餘絕無師說。

晉世祕府所存、有古文尙書經文、今無有傳者。及永嘉之亂、歐陽大小夏侯尙書並亡。濟南伏生之傳、唯劉向父子所著五行傳、是其本法、而又多乖戾。至東晉、豫章內史梅賾、始得安國之傳、奏之、時又闕舜典一篇。齊建武中、吳姚方輿、於大桁市得其書、奏上、比馬、鄭所注、多二十八字、於是始列國學。梁・陳所講、有孔・鄭二家、齊代唯傳鄭義。至隋、孔・鄭並行、而鄭氏甚微。自餘所存、無復師說。又有尙書逸篇、出於齊・梁之間、考其篇目、似孔壁中書之殘缺者、故附尙書之末。

『書』の起源はというと、文字の誕生と同時にである。孔子は周の王室で『書』を閲覽し、虞・夏・商・周の四王朝の

典籍をみつめて、それを取捨選擇し、上は虞から下は周まで、百篇に構成して、配列のうえ編集した。

秦の學術破壊をこうむったため、漢にはいると、濟南の伏生が二十八篇を口傳していたのみであった。別に河内の婦人が「泰誓」の一篇を發見して、獻上した。伏生は『尙書傳』四十一篇を著わして、それを同郷の張生に傳授し、張生は千乘の歐陽生に傳授し、歐陽生は同郷の兒寬に傳授し、兒寬は歐陽生の子に傳授し、そこから代々うけつがれて、曾孫の歐陽高に及んだが、それが『尙書』の「歐陽の學」といわれるものである。また夏侯都尉という者が、張生について學び、それを同族の後輩始昌に傳授し、始昌は同族の後輩勝に傳授したが、それが「大夏侯の學」となった。勝はおいの建に傳授したが、それはあらたに「小夏侯の學」となった。こうして歐陽・大夏侯・小夏侯の三學派が生まれ、みな國學の科目に採用された。後漢にはいっても、きれめなく傳えられていたが、なかでも歐陽學派が最も隆盛をほこった。

さかのぼって漢の武帝の時、魯の恭王が孔子の舊居をう

ちこわして、その子孫孔惠の藏書を發見したが、それはすべて古文で書かれていた。孔安國が今文のテキストをもとに比較してみると、二十五篇数が多い。そのなかの「泰誓」一篇は河内の婦人が獻上したものとちがっていた。また濟南の伏生が暗誦していたなかには、篇の合わさっているものが五篇あった。孔安國は古文にもとづいて、それらの篇目を擴げ、「隸古」の文字（古文風の隸書、或いは隸書風の古文）で書きうつし、計五十八篇に編集した。のこりのものは竹簡がいりみだれて、理解できないので、そっくり朝廷の文庫におさめた。孔安國はさらに五十八篇に注を施したが、あいにく天子呪詛事件が生じたために、奏上することができず、その學問を個人的に都尉朝に傳授し、都尉朝は膠東の庸生に傳授し、それが「尙書古文の學」といわれるものだが、國學の講座にはとりあげられなかった。後漢の世に扶風の杜林は、『古文尙書』をうけついでいて、同郡の賈逵がそれに訓詁を施し、馬融が注をつけ、鄭玄もまたその注釋を著わした。しかしそれが傳承していたのは、二十九篇のみであつたし、そのうえ今文も混入して

いて、孔安國のもとのテキストではなかった。それ以外のものについては祖述される學説がまったくなかった。

晉の時、圖書寮の藏書の中に、『古文尙書』の經文があつたが、今日それをうけついでいる者はいない。永嘉の亂の際に、歐陽・大夏侯・小夏侯の『尙書』はすべてほろびた。濟南の伏生の傳（『尙書傳』）の方は、劉向父子の著になる『五行傳』だけが、その本來のかたちをのこしているが、それにも齟齬する點が多い。東晉に入ると、豫章の内史梅賾が、はじめて孔安國の傳を發見して、天子にたてまつたが、當時はそれも「舜典」の一篇が不足していた。南齊の建武年間、吳の姚方興が、大桁の市場でその本をみつけて、上呈したが、馬融・鄭玄が注をつけた本より、二十八字多いものであり、ここにはじめて國學の科目に公認された。梁と陳の世に講義されたのには、孔安國と鄭玄の二つの學派があつたが、北齊では鄭玄の解釋だけが傳承された。隋にはいると、孔安國と鄭玄とがともに行なわれ、そして鄭玄の方はだいぶすたれていった。そのほかののこっているものには、もう祖述される學説がない。またべつに『尙

『書逸篇』という本が、齊梁の頃にあらわれ、その篇目をしらべてみると、孔氏の土壁の中から出土した本の断片のようであるため、『尚書』の末尾につけくわえておく。

- (1) 書之所興、蓋與文字俱起 漢志は、「河出圖、雒出書、聖人則之」という『易』繫辭傳のこゝばを引き、「故書之所起遠矣」という。傳孔安國「尚書序」に、「古者伏羲氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉」。
- (2) 自孔子觀書周室至編而序之 『史記』孔子世家に、「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事」。漢志に、「至孔子纂焉、上斷於堯、下訖於秦、凡百篇、而爲之序、言其作意」。また「尚書序」に、「先君孔子、生於周末、觀史籍之煩文、懼覽之者不一。遂乃定禮樂、明舊章、……討論墳典、斷自唐虞以下、訖于周、芟夷煩亂、翦截浮辭、舉其宏綱、撮其機要、足以垂世立教。典謨訓誥誓命之文、凡百篇」。
- (3) 遭秦滅學三句 『史記』儒林列傳に、「秦時焚書、伏生壁藏之。其後兵大起、流亡。漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇、即以教于齊魯之間。『漢書』儒林傳も同じ。漢志はその要旨を撮って、「秦燔書禁學、濟南伏生獨壁藏之。漢興亡失、求得二十九篇、以教齊魯之間」という。隋志の編者は『論衡』にもとづき、下段に見える河内の女子の獻じた秦

誓一篇を合わせて二十九篇になると考えている。伏生が『書』を口傳したことは、『尚書序』に、「濟南伏生、年過九十、失其本經、口以傳授、裁二十餘篇」とあるのによる。伏生については、『史記』儒林傳の索隱に、「按、張華云名勝、漢紀云字子賤」とある。

- (4) 河内女子得泰誓一篇二句 『論衡』正說篇による。易家類注(9)参照。なお、『尚書序』の正義によれば、『論衡』の他にも、『後漢史』(未詳)建安十四年の條に、黃門侍郎房宏が同趣旨のことがらを述べた記述があった由である。
- (5) 伏生作尚書傳四十一篇 漢志に、「經二十九卷、傳四十一篇」が著録されている。
- (6) 自授同郡張生至三家並立 『書』の學統については、すでに『易』の場合がそうであったように、『後漢書』儒林傳の記述をばそのまゝ襲いでいる。曰く、「前書云、濟南伏生傳尚書、授濟南張生及千乘歐陽生、歐陽生授同郡兒寬、寬授歐陽生之子、世世相傳、至曾孫歐陽高、爲尚書歐陽氏學。張生授夏侯都尉、都尉授族子始昌、始昌傳族子勝、爲大夏侯氏學。勝傳從兄子建、建別爲小夏侯氏學、三家皆立博士」。これは『史記』『漢書』儒林傳の關係箇所をまとめたもの。伏生—張生—歐陽生という傳授の系統が、隋志では伏生—張生—歐陽生となっている。『史記』『漢書』は前者に同じ。『漢書』儒林傳によれば、歐陽生は伏生の直弟子であったというから、これはやはり隋志の筆者の思いちがいだろう。

(7) 歐陽生 『漢書』儒林傳に、「歐陽生、字和伯、千乘人也。事伏生、授倪寬」。

(8) 兒寬 歐陽生と同じ千乘の人。歐陽生に事えて『書』を治め、また孔安國からも教えを受けた。官位は御史大夫に至る。『漢書』卷五十八に傳があり、同儒林傳にも關連記述がある。儒林傳には、「歐陽・大小夏侯氏學、皆出於寬」という。

(9) 歐陽高 『漢書』儒林傳によれば、字は子陽。博士となった。漢志に著録する『歐陽章句』三十一卷は、彼の作という。(10) 始昌 夏侯始昌は、魯の人。五經に通じて、『齊詩』『尚書』を教授し、武帝に重んぜられた。太傳となる。『漢書』卷七十五に傳がある。

(11) 勝 夏侯勝、字は長公。始昌から『尚書』及び『洪範五行傳』を受け、のち兒寬の門人問卿にも師事した。官は太子太傅に至る。『漢書』卷七十五に傳があり、同儒林傳にも記事有する。

(12) 建 夏侯建、字は長卿。前記夏侯勝の從兄の子。『漢書』卷七十五に、「自師事勝及歐陽高、左右采獲、又從五經諸儒問與尚書相出入者、牽引以次章句、具文飾說。勝非之曰、建所謂章句小儒、破碎大道。建亦非勝爲學疏略、難以應敵。建卒自顯門名經、爲議郎博士、至太子少傅」。

(13) 故有歐陽大小夏侯二句 漢志に、「訖孝宣世、有歐陽大小夏侯氏、立於學官」。

(14) 訖漢東京三句 『後漢書』儒林傳に、「中興、北海牟融習

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

大夏侯尚書、東海王良習小夏侯尚書、沛國桓榮習歐陽尚書。榮世習相傳授、東京最盛」。後漢における歐陽尚書學の隆盛は、桓榮及びその門下によってもたらされたといつてよい。

『後漢書』列傳二十七桓榮傳の論に、「伏氏自東京相襲爲名儒、以取爵位。中興而桓氏尤盛、自榮至典、世宗其道、父子兄弟代作帝師、受其業者、皆至卿相、顯乎當世」。

(15) 自初漢武帝時至字皆古文 漢志に、「古文尚書者、出孔子壁中。武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尚書及禮記・論語・孝經凡數十篇、皆古字也。共王往入其宅、聞鼓琴瑟鍾磬之音、於是懼、乃止不壞」。『尚書序』に、「至魯共王、好治宮室、壞孔子舊宅、以廣其居。於壁中得先人所藏古文虞夏商周之書及傳論語・孝經、皆科斗文字。王又升孔子堂、聞金石絲竹之音、及不壞宅。悉以書還孔氏」。魯の恭王は、景帝の子で、武帝の異母弟。名は餘。在位前一五五―前一二八。『漢書』卷五十八に傳がある。古文『尚書』の發見については、上記の他、劉歆「移書讓太常博士」(『文選』卷四十三)、「論衡」正說篇にも記事が存する。

(16) 末孫惠 漢志の顔師古注にいう。「家語云、孔、騰、字、子、襄、畏秦法峻急、藏尚書・孝經・論語於夫子舊堂壁中、而漢記尹敏傳云孔鮒所藏。二說不同、未知孰是」。孔鮒、字は子魚、は孔子八世の孫で、陳涉に仕えて博士となった人物。孔騰は、その弟で、惠帝のとき博士になった。孔鮒に假託される『孔叢子』獨治篇によれば、鮒が家に傳わる書を秦の焚書に備え

て藏したという。「陳餘謂子魚曰、秦將滅先王之籍、而子爲書籍之主、其危矣。子魚曰、……顧有可懼者、必或求天下之書焚之、書不出則有禍。吾將先藏之、以待其求、求至無患矣」。本文のいう孔惠なる人物は未詳。「經典釋文序錄」も隋志と同じく、「古文尙書者、孔惠之所藏也」といひ、『史通』古今正史にも、「孔子之末孫曰惠、壁藏其書」とある。

(17) 自孔安國以今文校之至而未得立 この一段の内容に相當する漢志の記述は、以下の如く至つて簡略である。「孔安國者、孔子後也。悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇。安國獻之。遭巫蠱事、未列於學官」。孔安國は、孔子十二世の孫。『史記』孔子世家に、「安國爲今皇帝博士、至臨淮太守」とある。

(18) 自濟南伏生所誦至並送之官府 「尙書序」に、「科斗書廢已久、時人無能知者。以所聞伏生之書、考論文義、定其可知者、爲隸古定、更以竹簡寫之、增多伏生二十五篇。伏生又以舜典合於堯典、益稷合於皋陶謨、盤庚三篇合爲一、康王之誥合於顧命。復出此篇并序、凡五十九篇、爲四十六卷。其餘錯亂摩滅、弗可復知。悉上送官、藏之書府、以待能者」。伏生よりも増えた二十五篇とは、陸德明に指摘があるように、虞書の大禹謨、夏書の五子之歌・胤征、商書の仲虺之誥・湯誥・伊訓・太甲三篇・咸有一德・說命三篇、周書の泰誓三篇・武成・旅獒・微子之命・蔡仲之命・周官・君陳・畢命・君牙・冏命の各篇、すなわちいわゆる偽古文の部分である。

(19) 有五篇相合 注(18)の「尙書序」にいう舜典（堯典と合篇）・

益稷（皋陶謨と合篇）・康王之誥（顧命と合篇）及び盤庚二篇（三篇を以て一となす）の計五篇をいう。

(20) 以隸古字寫之 「尙書序」の正義に、「言隸古者、正謂就古文體而從隸定之。存古爲可慕、以隸爲可識、故曰隸古。以隸隸而猶古、由此故謂孔君所傳爲古文也」。

(21) 安國又爲五十八篇作傳三句 「尙書序」に、「承認爲五十九篇作傳。於是遂研精覃思、博考經籍、採摭羣言、以立訓傳、約文申義、敷暢厥旨、庶幾有補於將來。書序序所以爲作者之意、昭然義見、宜相附近。故引之各冠其篇首。定五十八篇、既畢、會國有巫蠱事、經籍道息。用不復以聞。傳之子孫、以貽後世」。

(22) 巫蠱事 武帝治世の末年（征和元年、前九二年）に生じた、皇太子による天子呪詛事件。江充のでっちあげとされる。

『漢書』卷四十五江充傳、同卷六十三武五子傳參照。

(23) 私傳其業於都尉朝四句 『後漢書』儒林傳に、「又魯人孔安國傳古文尙書、授都尉朝、朝授膠東庸諱、爲尙書古文學、未得立」。同注は都尉朝について、「姓都尉、名朝」という。

(24) 自後漢扶風杜林至鄭玄亦爲之注 『後漢書』儒林傳の「扶風杜林傳古文尙書、林同郡賈逵爲之作訓、馬融作傳、鄭玄注解、由是古文尙書遂顯于世」を、ほぼそのまま踏襲している。杜林（？—四七）、字は伯山、扶風茂陵の人。博雅の通儒とうたわれ、官位は大司空に至った。『後漢書』列傳十七に傳がある。

(26) 賈逵 (三〇—一〇一)、字は景伯、扶風平陵の人。官位は

侍中に至った。後漢を代表する儒者の一人で、特に古文『尚書』と『左傳』に熱意を注いだ。『後漢書』列傳二十六の本

傳に、「逵數爲帝言古文尚書與經傳爾雅詁訓相應、詔令撰歐陽大小夏侯尚書古文同異、逵集爲三卷、帝善之」という。

(27) 馬融作傳 本志目錄に、馬融注『尚書』十一卷が著録される。易注(24)参照。

(28) 鄭玄亦爲之注 本志目錄に、鄭玄注『尚書』九卷が著録される。易注(23)参照。

(29) 雜以今文、非孔舊本 「經典釋文序錄」には次のようにある。「案今馬鄭所注、並伏生所誦、非古文也。孔氏之本絕。

是以馬、鄭、杜預之徒、皆謂之逸書。王肅亦注今文、而解大與古文相類、或肅私見孔傳而祕之乎」。

(30) 及永嘉之亂二句 「經典釋文序錄」には、「永嘉喪亂、衆家之書並滅亡、而古文孔傳始興、置博士、鄭氏亦置博士一人」という。

(31) 劉向父子所著五行傳 『漢書』卷三十六劉向傳に、「向見尚書洪範、箕子爲武王陳五行陰陽休咎之應。向乃集合上古以來歷春秋六國至秦漢符瑞災異之記、推迹行事、連傳禍福、著其占驗、比類相從、各有條目、凡十一篇、號曰洪範五行傳、論奏之」。漢志には「劉向五行傳記十一卷」として、また隋志の目錄には、「尚書洪範五行傳論十一卷」として著録される。

(32) 自東晉至時又闕舜典一篇 「經典釋文序錄」に、「江左中

隋書經籍志序譯注(一) (興膳・川合)

興、元帝時、豫章內史枚、驥、奏上孔傳古文尚書。亡舜典一篇、購不能得。乃取王肅注堯典從慎微五典以下、分爲舜典篇以續之。學徒遂盛」。また堯典の正義にいう。「又晉書皇甫謐傳云、

姑子外弟梁柳邊得古文尚書。故作帝王世紀、往往載孔傳五十八篇之書。晉書又云、晉太保公鄭冲以古文授扶風蘇愉、愉字休預、預授天水梁柳字洪季、即謚之外弟也、季授城陽臧曹字彦始、始授郡守子汝南梅、嶺字仲眞、又爲豫章內史、遂於前晉奏上其書而施行焉。ここに引く『晉書』は六朝人の手になるものだが、數種存する同名の書のうちどれを指すかは不明。

梅頤の獻じた古文『尚書』が國學に採用されたことは、『宋書』禮志一の「太興初、議欲修立學校、唯周易王氏、尚書鄭氏、古文孔氏」云云という記述(『晉書』荀崧傳・『通典』卷五十三にも見える)からもうかがえる。また注(30)に引く「經典釋文序錄」参照。

(33) 自齊建武中至始列國學 姚方興は、もと與方に作るが、中華書局刊標點本(底本)の改訂に従う。「經典釋文序錄」に、「齊明帝建武中、吳興姚方興采馬王之注、造孔傳舜典一篇、云於大觥頭買得、上之。梁武時、爲博士、議曰、孔序稱伏生誤合五篇、皆文相承接、所以致誤、舜典首有曰若稽古、伏生雖昏耄、何容合之。遂不行用」。また堯典の正義に、「時已亡失舜典一篇、晉末范甯爲解時、已不得焉。至齊蕭蕭建武四年、姚方興於大觥頭得而獻之。議者以爲孔安國之所注也。值方興有罪、事亦隨寢。至隋開皇二年、購募遺典、乃得其篇焉」。

同様の記事が、舜典の正義にも見える。さらに『史通』古今正史でも、姚方輿の獻じた書について、「舉朝集議、咸以爲非」といつている。これらによれば、姚氏の舜典が國學に採られたという隋志の記述は不正確である。

- (34) 多二十八字 舜典冒頭の「曰若稽古帝舜、曰重華、協于帝、潛哲文明溫恭、允塞、玄德升聞、乃命以位」の二十八字を指す。正義に、「昔東晉之初、豫章內史梅嶺上孔氏傳、猶闕舜典、自此乃命以位已上二十八字、世所不傳、多用王范之注補之」という。

- (35) 齊代唯傳鄭義 『北齊書』儒林傳に、「齊時儒士、罕傳尚書之業、徐遵明兼通之。遵明受業於屯留王總、傳授浮陽李周仁及渤海張文敬及李鉉・權會、並鄭康成所注、非古文也。下里諸生、略不見孔氏注解。武平末、河間劉光伯・信都劉士元始得費彪義疏、乃留意焉。『北史』儒林傳にも同じ記述がある。なお、南北經學の比較に關しては、易注の參照のこと。
- (36) 至隋孔鄭並行二句 「經典釋文序錄」に、「近唯崇古文、馬・鄭王注遂廢、今以孔氏爲正、其舜典一篇、仍用王肅本」。『史通』古今正史によれば、隋の劉炫が姚方輿の獻じた舜典を採つてから、舜典はもっぱらこのテキストが行なわれたという。

- (37) 自又有尚書逸篇至附尚書之末 本志目錄に『尚書逸篇』二卷が著録されている。

詩

詩者、所以導達心靈、歌詠情志者也。故曰、在心爲志、發言爲詩。⁽³⁾ 上古人淳俗樸、情志未惑。其後君尊於上、臣卑於下、面稱爲諂、目諫爲謗、故誦美譏惡、以諷刺之。初但歌詠而已、後之君子、因被管絃、以存勸戒。夏・殷已上、詩多不存。周氏始自后稷、而公劉克篤前烈、太王肇基王迹、文王光昭前緒、武王克平殷亂、成王・周公化至太平、誦美盛德、踵武相繼。幽・厲板蕩、怨刺並興。其後王澤竭而詩亡、魯太師摯次而錄之。孔子刪詩、上采商、下取魯、凡三百篇。至秦、獨以爲諷誦、不滅。

漢初、有魯人申公、受詩於浮丘伯、作詁訓、是爲魯詩。⁽⁴⁾ 齊人轅固生亦傳詩、是爲齊詩。⁽⁵⁾ 燕人韓嬰亦傳詩、是爲韓詩。⁽⁶⁾ 終于後漢、三家並立。

漢初又有趙人毛萼善詩、自云子夏所傳、作詁訓傳、是爲毛詩古學、而未得立。後漢有九江謝曼卿、善毛詩、又爲之訓。東海衛敬仲、受學於曼卿。先儒相承、謂之毛詩。序、子夏所創、毛公及敬仲又加潤益。鄭衆・賈逵・馬融、並作毛

詩傳、鄭玄作毛詩箋。齊詩、魏代已亡。魯詩亡於西晉、韓詩雖存、無傳之者。唯毛詩鄭箋、至今獨立。又有業詩、奉朝請業遵所注、立義多異、世所不行。

詩とは、たましいに表現を與え、こころの内面を歌いあげるでだてである。そこで、「心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す」といわれる。上代には人間も社會も淳朴であつたので、こころの中にまどいが生ずることもなかつた。だがのちに君臣の尊卑上下の身分が分かれてくると、面とむかつてほめたてれば追従とされたり、まのあたりにいさめれば誹謗ととられたりしたので、そのために美德はたたえ不都合はとがめだて、そうして諷諭したのである。當初は單に聲に出して歌つただけであつたが、後になると君子が樂器の演奏にのせて、勸懲の意をつたえた。夏・殷以前は、のこっていない詩が多い。周王朝は后稷から始まり、公劉は先代の功績をみごとに充實させ、太王は王業の基礎を築きあげ、文王は先人の事業を輝やかしいものとし、武王は殷の混亂をしかとおさめ、成王・周公の教化は太平

をもたらししたので、立派な徳をうたいたたえることが、次々と繼承されたのである。幽王・厲王の政治は「板」や「蕩」の詩に歌われているように、混亂したため、一齊に怨嗟と非難が湧きおこつた。それ以後、君王の恩澤は枯れつき詩はほろびたが、魯の太師であつた摯が配列して記録した。孔子は詩をえりすぐって上は商から下は魯までをとりあげ、あわせて三百篇とした。秦（の焚書）の際には、詩だけは口頭で歌われるものであつたために、滅びずにすんだ。

漢の初め、魯の人に申公という者があり、彼が詩の學問を浮丘伯から學んで、注釋を施したが、それが「魯詩」である。また齊の人轅固生も詩を傳授したが、それが「齊詩」である。燕の人韓嬰も詩を傳授し、それが「韓詩」である。後漢がおわるまで、その三學派の講座がそろつて國學におかれていた。

漢の初めにはそれとは別に趙の人毛萇が詩の學問にすぐれ、子夏から傳授されたと稱して『詁訓傳』を著し、これが「毛詩古學」であるが、しかし國學にはとりたてられなかつた。後漢には九江の謝曼卿というものが、毛詩の學問

にすぐれ、彼もそれに注釋を加えた。東海の衛敬仲は、曼卿から傳授をうけた。これを過去の學者たちが次々とうけつぎ、「毛詩」といわれているのである。「序」は子夏の手になるもので、毛公と衛敬仲がそれに筆を加えた。鄭衆・賈逵・馬融らがいずれも『毛詩傳』を著わし、鄭玄は『毛詩箋』を書いた。「齊詩」は魏の時代にはやほろび、「魯詩」は西晉の頃にほろんだ。「韓詩」は本はのこつてはいるが、傳承する人がいない。『毛詩鄭箋』だけが、今日に至るまで國學に講座をもっている。以上とは別に『業詩』というものがあり、奉朝請であつた業遵が注を施したものであるが、解釋に異説を立てたところが多く、世間に行なわれていない。

- (1) 詩者三句 「心鑑」は、おそらく六朝人の造語。たとえば顏延之の「庭詒」(『宋書』顏延之傳引)に、「含理之貴、惟神與交、幸有心鑑、義無自惡」などある。「歌詠情志」は、もとより『尚書』舜典の「詩言志、歌永言」にもとづく。孔傳に、「謂詩言志以導之、歌詠其義以長言」。前句の「導達」は、この孔傳の「導」を二字に引き伸ばしたものと思われる。漢志は舜典の句を引いたのち、「故哀樂之心感、歌詠之聲發」

という。また「詩大序」の「情動於中、而形於言、言之不足、故嗟歎之、嗟歎之不足、故永歌之、永歌之不足、不知手之舞之足之蹈之也」や「吟詠情性、以風其上」も、當然筆者の意識にあつたはずである。

- (2) 在心爲志二句 「詩大序」に、「詩者、志之所之也。在心爲志、發言爲詩」。

- (3) 自上古人淳俗樸至以諷刺之 鄭玄「六藝論」(「詩譜序」正義引)の、「詩者、弦歌諷諭之聲也。自書契之興、朴略尙質、面稱不爲諂、目諫不爲誘、君臣之接、如朋友然、在於懇懇而已。斯道稍衰、姦僞以生、上下相犯。及其制禮、尊君卑臣、君道剛嚴、臣道柔順。於是箴諫者希、情志不通、故作詩者以誦其美、而譏其過」にもとづいている。「諷刺」は、「詩大序」に、「上以風化下、下以風刺上、主文而譏諫、言之者無罪、聞之者足以戒、故曰風」。

- (4) 後之君子三句 『史記』孔子世家に、「三百五篇、孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。鍾嶸『詩品』序に、「古曰詩頌、皆被之金竹、故非調五音、無以諧會。……今既不被管絃、亦何取于聲律邪」。「勸戒」は、杜預の「左傳序」に、「其教之所存、文之所害、則刊而正之、以示勸戒」とある。

- (5) 夏殷已上二句 鄭玄「詩譜序」に、「虞書曰、詩言志、歌永言、聲依律、律和聲、然則詩之道、放於此乎。有夏承之、篇章泯棄、靡有孑遺。邇及商王、不風不雅」。

- (6) 自周氏始自后稷至顓武相繼 この一段は正風正雅について

述べたもので、ほぼ「詩譜序」の敘述に沿っている。曰く、
「周自后稷、播種百穀、黎民阻飢、茲時乃粒、自傳於此名也。
陶唐之末、中葉公劉、亦世脩其業、以明民共財。至於大王、
季、克塈顧天。文武之德、光熙前緒、以集大命於厥身、遂爲
天下父母、使民有政有居。其時詩風有周南・召南、雅有鹿鳴・
文王之屬。及成王・周公致太平、制禮作樂、而有頌聲興焉。
盛之至也。本之由此風雅而來、故皆錄之、謂之詩之正經」。

- (7) 公劉克篤前烈二句 『尙書』武成に、「王若曰、嗚呼羣后、
惟先王建邦啓土、公劉克篤前烈、至于大王、肇基王迹」とある。
(8) 誦美盛德 「詩大序」に、「頌者、美盛德之形容、以其成
功、告於神明者也」。

- (9) 踵武相繼 『楚辭』離騷に、「忽奔走以先後兮、及前王之
踵武」とある。

- (10) 幽厲板蕩二句 この二句は變風變雅についていう。「詩譜
序」に、「後王稍更陵遲、懿王始受譖、享齊哀公、夷身失禮之後、
邛不尊賢。自是而下、厲也幽也、政教尤衰、周室大壞。十
月之交、民勞板蕩、勃爾俱作。衆國紛然、刺怨相尋」。大雅
「板」の序に、「板、凡伯刺厲王也」とあり、詩に「上帝板
板、下民卒瘁」、その鄭箋に「王爲政、反先王與天之道」と
いう。またそれに續く「蕩」の序に、「蕩、召穆公傷周室大
壞也。厲王無道、天下蕩蕩無綱紀、故作是詩也」。詩に「蕩
蕩上帝、下民之辟」といい、鄭箋は「蕩蕩、法度廢壞之貌」
と注する。「板蕩」を連語に用いた例としては、謝靈運「擬

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川倉)

魏太子鄴中集詩」(『文選』卷三十)の「幽厲昔崩亂、桓靈今
板蕩」などがあげられよう。「怨刺」は、『漢書』禮樂志二
に、「周道始缺、怨刺之詩起」。

- (11) 其後王澤竭而詩亡 『孟子』離婁下に、「王者之迹熄而詩
亡、詩亡然後春秋作」、『漢書』禮樂志二に、「王澤既竭而詩
不能作」、班固「兩都賦序」に、「昔成康沒而頌聲寢、王澤竭
而詩不作」などがある。

- (12) 魯太師摯次而錄之 『論語』泰伯篇に、「子曰、師摯之始、
關雎之亂、洋洋乎盈耳哉」。何晏集解に引く鄭玄の注には、
「師摯、魯大師之名也。始猶首也。周道既衰微、鄭衛之音作、
正樂廢而失節。魯大師摯識關雎之聲、而首理其亂者、洋洋乎
盈耳哉、聽而美也」とある。

- (13) 自孔子刪詩至不滅 孔子刪詩のことは、もちろん『史記』
孔子世家の記すところだが、本文が直接據ったのは漢志の記
述である。「孔子純取周詩、上采殷、下取魯、凡三百五篇。
遭秦而全者、以其諷誦、不獨在竹帛故也」。

- (14) 自漢初至未得立 前漢における詩傳授の經緯は『漢書』儒
林傳に詳しいが、そのまともかたは易・書の場合と同じく、
ほぼ『後漢書』儒林傳に従っている。「前書、魯人申公受詩
於浮丘伯、爲作詁訓、是爲魯詩。齊人轅固生亦傳詩、是爲齊
詩。燕人韓嬰亦傳詩、是爲韓詩。三家皆立博士。趙人毛萇傳
詩、是爲毛詩、未得立」。

- (15) 申公 漢の高祖の弟楚元王交とともに浮丘伯に師事した。

楚元王のもとで太傅となつたが、のち退いて民間に在り、孔安國等多くの弟子を育成した。『漢書』儒林傳は彼の教授の態度を、「申公獨以詩經爲訓詁以教、無傳（師古曰、口說其指、不爲解說之傳）、疑者則闕弗傳」と記す。漢志は、三家詩のうち魯詩を最も高く評價して、次のようにいう。「漢興、魯申公爲詩訓故、而齊轅固・燕韓生皆爲之傳。或取春秋、采雜說、咸非其本義、與不得已、魯最爲近之」。

(16) 轅固生 景帝のとき、詩によつて博士となり、のち清河王の太傅を拜した。門弟中では夏侯始昌が最もすぐれ、齊詩を繼承した。『漢書』儒林傳に傳がある。

(17) 韓嬰 文帝のときに博士となり、景帝のときには常山王の太傅となつた。『漢書』儒林傳に、「嬰推詩人之意、而作内外傳數萬言、其語頗與齊魯間殊、然歸一也。淮南貢生受之。燕趙間言詩者由韓生」とある。

(18) 三家並立 漢志に、「三家皆列於學官」。

(19) 漢初又有趙人毛萇善詩五句 漢志の「又有毛公之學、自謂子夏所傳、而河間獻王好之、未得立」に據っている。『漢書』儒林傳によれば、毛公は詩を治めて、河間獻王の博士となり、同じ趙の人賈長卿に傳授した。『漢書』はただ毛公と稱するのみで名をいわず、毛萇（或いは長）と名を以て稱せられるのは、『後漢書』儒林傳に始まる。注(14)参照。また隋志は『詁訓傳』の著者を毛萇とするが、鄭玄『詩譜』（毛詩關雎正義引）は、「魯人大毛公爲詁訓傳於其家、河間獻王得而獻之、

以小毛公爲博士」と二人の毛公の存したことをいい、さらに吳の陸賈の『毛詩草木蟲魚疏』は、毛亨を大毛公に、毛萇を小毛公に充てる。漢志は、「毛詩故訓傳三十卷」と著録する。(20) 後漢有九江謝曼卿三句 『後漢書』儒林傳に、「初、九江謝曼卿善毛詩、乃爲其訓」。

(21) 自東海衛敬仲至又加潤益 衛宏、字は敬仲。『後漢書』儒林傳に、「宏從曼卿受學、因作毛詩序、善得風雅之旨、于今傳於世」という。また「毛詩序」の作者については、『經典釋文』卷五に、「沈重云、案鄭詩譜意、大序是子夏作、小序是子夏・毛公合作、卜商意有不盡、毛更足成之。或云、小序是東海衛敬仲所作」とある。沈重は後梁の散騎常侍で、『毛詩義疏』二十八卷が本志目録に見える。

(22) 鄭衆賈逵馬融三句 『後漢書』儒林傳に、「中興後、鄭衆・賈逵傳毛詩、後馬融作毛詩傳、鄭玄作毛詩箋」。鄭衆・賈逵兩家の詩傳は、隋志目録に見られず、わずかに馬融の傳について、原注が阮孝緒『七錄』に據りつつ、「梁有毛詩十卷、馬融注亡」と記している。

(23) 自齊詩魏代已亡至今獨立 「經典釋文序錄」に、「後漢鄭衆・賈逵傳毛詩、馬融作毛詩注、鄭玄作毛詩箋、申明毛義、雖三家、於是三家遂廢矣」、さらに「前漢魯齊韓三家詩、列於學官、平帝世、毛詩始立。齊詩久亡、魯詩不過江東、韓詩雖在、人無傳者。唯毛詩鄭箋、獨立國學、今所遵用」とある。本志目録に「韓詩二十二卷」が著録される。

24) 又有業詩四句 本志目錄に「業詩二十卷、宋奉朝請業造注」が見える。業造は、傳未詳。

禮

自大道既隱、天下爲家、先王制其夫婦父子君臣上下親疎之節。至于三代、損益不同。周衰、諸侯僭恣、惡其害己、多被焚削。自孔子時、已不能具、至秦而頓滅。

漢初、有高堂生傳十七篇、又有古經、出於淹中。而河間獻王、好古愛學、收集餘燼、得而獻之、合五十六篇、並威儀之事。而又得司馬穰苴兵法一百五十五篇、及明堂陰陽之記、並無敢傳之者。唯古經十七篇、與高堂生所傳不殊、而字多異。自高堂生、至宣帝時、后蒼最明其業、乃爲曲臺記。蒼授梁人戴德、及德從兄子聖、沛人慶普、於是有大戴・小戴・慶氏、三家並立。後漢唯曹元傳慶氏、以授其子褒。然三家雖存並微、相傳不絕。漢末、鄭玄傳小戴之學、後以古經校之、取其於義長者作注、爲鄭氏學。其喪服一篇、子夏先傳之、諸儒多爲注解、今又別行。

而漢時有李氏得周官。周官蓋周公所制官政之法、上於河

間獻王、獨闕冬官一篇。獻王購以千金不得、遂取考工記以補其處、合成六篇奏之。至王莽時、劉歆始置博士、以行於世。河南轅氏及杜子春受業於歆、因以教授。是後馬融作周官傳、以授鄭玄、玄作周官注。

漢初、河間獻王又得仲尼弟子及後學者所記一百三十一篇、獻之、時亦無傳之者。至劉向考校經籍、檢得一百三十篇、向因第而敘之。而又得明堂陰陽記三十三篇、孔子三朝記七篇、王史氏記二十一篇、樂記二十三篇、凡五種、合二百二十四篇。戴德刪其煩重、合而記之、爲八十五篇、謂之大戴記。而戴聖又刪大戴之書、爲四十六篇、謂之小戴記。漢末馬融、遂傳小戴之學。融又定月令一篇、明堂位一篇、樂記一篇、合四十九篇。而鄭玄受業於融、又爲之注。

今周官六篇・古經十七篇・小戴記四十九篇、凡三種。唯鄭注立於國學、其餘並多散亡、又無師說。

(五帝時代の) 大いなる道が影をひそめて以來、國家の中に家の關係がとりこまれ、先王は夫と妻、父と子、君主と臣下、身分の高い者と低い者、身近な者と物遠い者など

の間のけじめを定めた。夏・殷・周の三王朝にいたると、その制度にいろいろなうつりかわりが生じた。周が衰退し、大名たちが王を僭稱するようになると、禮は自分に不都合なので、少なからず燒却されたり削除されたりした。孔子の時から、もう完全にはそろわず、秦（の焚書）になってはたと減びてしまった。

漢の初め、高堂生という者が十七篇を傳承していたが、別に古經が淹から出土した。一方河間獻王は古典の學問が好きな人であったので、焚書の燃えのこりを收集して獻上し、それを合わせて五十六篇、すべて禮式についての記事であった。ほかにさらに司馬遷の『兵法』百五十五篇と『明堂陰陽』の記録があったが、どちらも傳授しようとする者がなかった。古經の十七篇だけは、高堂生が傳承していたのと同じものであったが、字の異同が多かった。高堂生から傳えられて、宣帝の時には、后蒼が最もその學問にあかるく、彼は『曲臺記』を著した。后蒼は梁の人戴德、その從兄（いとこ）の子戴聖、そして沛の人慶普に傳授した。かくて大戴・小戴・慶氏の三學派が生まれ、ともに國學に講座

をもった。後漢ではただ曹元（充）が慶氏の學問をうけつぎ、それを子の曹褒に傳授した。そして三つの學派はみなかばそい存在ではあったものの、傳承のとぎれることはなかった。後漢の後期に鄭玄が小戴の學問をうけつぎ、のちに古經によって校勘しながら、内容のすぐれた方を採用して注を作り、鄭氏の學問を作りあげた。そのうちの「喪服」の一篇は、子夏が最初に傳を作ったもので、注釋を施した學者も多く、いま單行されている。（以上『儀禮』）

一方、漢の時に李氏という者が『周官』を發見した。『周官』とは周公が作られた行政上の規範であり、河間獻王に上呈されたが、「冬官」の一篇だけが缺けていた。獻王は莫大な懸賞金を掲げて搜し求めたが手に入らず、そこで「考工記」を缺けた箇處の埋め合わせとし、計六篇に編成して天子にたてまつった。王莽の時代に入ると、劉歆が始めて『周禮』の博士をもうけたので、世間に擴まることとなった。河南の綏氏と杜子春（綏氏の杜子春）が劉歆について學び、彼らもそれを弟子に教えた。その後、馬融は『周官傳』を著わして、鄭玄に傳授し、鄭玄は『周官

『注』を著わした。(以上『周禮』)

漢の初め、河間獻王はさらに孔子の門下及びそれ以後の學者たちが書きしるした百三十一篇の記録を手に入れて獻上したが、當時はその學問を傳授する者がいなかった。劉向が經籍を調査した時になって、百三十篇を確認できたので、彼はそこで配列のうえ編集した。またべつに『明堂陰陽記』三十三篇、『孔子三朝記』七篇、『王氏氏記』二十一篇、『樂記』二十三篇を手に入れ、それら五種を合わせると、二百十四篇にのぼった。戴德はその重複した部分を刪り、一つにまとめて書きあらため八十五篇にしたが、それが『大戴記』といわれるものである。そして戴聖がさらに『大戴記』を四十六篇に縮約したのが、『小戴記』といわれるものである。かくて後漢後期に馬融は、小戴の學問をうけついで。馬融はまた「月令」一篇、「明堂位」一篇、「樂記」一篇を選定し、先の篇と合わせて四十九篇にした。それを鄭玄が馬融から學びうけ、さらに注を施した。(以上『禮記』)

今日、『周官』(『周禮』)六篇、古經(『儀禮』)十七篇、『小戴記』(『禮記』)四十九篇の、全部で三種がこのこっている。

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

鄭玄の注釋だけが國學に講座を設けられているが、その他のものはいずれも散佚したり減んだりしたものが多く、祖述される學說もない。

- (1) 自大道既隱二句 『禮記』禮運のことばによる。「大道之行也、天下爲公」という太古の「大同」の世に對して、「今大道既隱、天下爲家」とあり、夏・殷・周三代の「小康」の世を指している。
- (2) 先王制其夫婦父子君臣上下親疎之節 『易』序卦傳に、「有天地、然後有萬物、有萬物、然後有男女、有男女、然後有夫婦、有夫婦、然後有父子、有父子、然後有君臣、有君臣、然後有上下、有上下、然後禮義有所錯」とある。漢志もこれにもとづいて、「易曰、有夫婦父子君臣上下、禮義有所錯」という。
- (3) 至于三代二句 『論語』爲政篇に、「子曰、殷因於夏禮、所損益、可知也。周因於殷禮、所損益、可知也。其或繼周者、雖百世可知也」。また『史記』禮書に、「余至大行禮官、觀三代損益、乃知緣人情而制禮、依人性而作儀、其所由來尙矣」とある。隋志の著者が直接據ったと思われる漢志の序には、注(2)に引いた『易』のことばにつづけて、「而帝王質文、世有損益、至周曲爲之防、事爲之制」という。
- (4) 自周衰至至秦而頌滅 漢志に、「及周之衰、諸侯將踰法度、惡其害己、皆滅去其籍、自孔子時而不具、至秦大壞」。

- (5) 諸侯僭志 『尚書』洪範に、君臣の分を説いて、「臣之有作福作威玉食、其害于而家、凶于而國、人用側頗僻、民用僭志」という。
- (6) 漢初二句 漢志に、「漢興、魯高堂生傳士禮十七篇」。すなわち『儀禮』十七篇をいう。高堂生が禮を傳えたことは、『史記』儒林傳に、「諸學者多言禮、而魯高堂生最本。禮固自孔子時而其經不具、及至秦焚書、書散亡益多、於今獨有士禮、高堂生能言之」と記される。高堂生については、同傳の索隱に謝承の言を引いて、「秦氏季代有魯人高堂伯」といい、「伯」は字、「生」は儒者の尊稱とする。
- (7) 自又有古經至並威儀之事 漢志に、「禮古經者、出於魯淹中及孔氏、與十七篇文相似、多三十九篇」とあり、「淹」については、蘇林が「里名也」と注する。劉歆「移書讓太常博士」(『漢書』卷三十六楚元王傳、『文選』卷四十三)には、「及魯恭王壞孔子宅、欲以爲宮、而得古文於壞壁之中、逸禮有三十九篇、書十六篇」と見える。また鄭玄「六藝論」(『禮記』大題正義・『經典釋文序錄』等引)には次のようにいう。「後得孔子壁中古文禮、凡五十六篇、其十七篇與高堂生所傳同、而字多異、其十七篇外則逸禮」。この古文禮は、漢志に「禮古經五十六卷、經十七篇」(原文は「經七十篇」)に作るが、劉敞等の説により正すと著録される。
- (8) 河間獻王 景帝の子で、武帝の異母弟、好學を以て聞える。『漢書』卷五十三の本傳に、「獻王所得書、皆古文先秦舊書、
- (9) 周官・尚書・禮・禮記・孟子・老子之屬、皆經傳說記、七十子之徒所論」とある。
- (9) 司馬穰苴兵法 『史記』卷六十四司馬穰苴傳に、「齊威王使大夫追論古者司馬兵法而附穰苴於其中、因號曰司馬穰苴兵法」。漢志では禮家のうちに、「軍禮司馬兵法百五十五篇」として著録される。隋書は子部兵家類に、「司馬兵法三卷」と記す。
- (10) 明堂陰陽之記 漢志に、「明堂陰陽三十三篇」が著録され、班固の原注に「古明堂之遺事」とある。また同序に、「(禮古經)及明堂陰陽・主史氏記所見、多天子諸侯卿大夫之制、雖不能備、猶繡倉等推土禮而致於天子之說。隋の牛弘が古制にならって明堂を修建するよう請うた上議(『隋書』卷四十九牛弘傳)にはいう。「案劉向別錄及馬宮・蔡邕等所見、當時有古文明堂禮、王居明堂禮、明堂圖、明堂大圖、明堂陰陽、太山通義、魏文侯孝經傳等、並說明堂之事。其書皆亡、莫得而正」。明堂のことは、『大戴禮記』明堂第六十七に記される。
- (11) 唯古經十七篇三句 この一節は、鄭玄「六藝論」にもとづく。注(7)参照。
- (12) 自高堂生四句 『漢書』儒林傳に、「孟卿、東海人也。事蕭奮、以授后倉・魯閭丘卿。倉說禮數萬言、號曰后氏曲臺記」。注に、「服虔曰、在曲臺校書署記、因以爲名。師古曰、曲臺殿在未央宮」。また漢志には「曲臺后倉九篇」と著録され、注に如淳の説を引いて、「行禮射於曲臺、后倉爲記、故

名曰曲臺記。漢官曰、大射于曲臺」といい、さらに管灼の説を引いて、「天子射宮也。西京無太學、於此行禮也」という。
(13) 后蒼最明其業 「經典釋文序錄」に、「孝宣之世、蒼爲最明」とある。后蒼、字は近君、東海郡の人。詩と禮に通じた。
『漢書』儒林傳に傳がある。蒼は倉とも記される。

(14) 自蒼授梁人戴德至三家並立 前漢における禮の傳授に關しては、『漢書』儒林傳に詳しいが、ここでは例によって『後漢書』儒林傳のまともかたに従っている。「蒼授梁人戴德及德兄子聖・沛人慶普。於是德爲大戴禮、聖爲小戴禮、普爲慶氏禮、三家皆立博士。」「漢書」によれば、戴德は字を延君といい、信都太傅となった。また戴聖は字を次君といい、九江太守に至った。慶普は字を孝公といい、東平太傅となった。

(15) 後漢唯曹元傳慶氏四句 『後漢書』儒林傳に、「中興已後、亦有大小戴博士、雖相傳不絶、然未有顯於儒林者。建武中、曹充習慶氏學、傳其子褒、遂撰漢禮」。曹元は、『後漢書』列傳二十五曹褒傳にも、「父充、持慶氏禮、建武中爲博士」とあり、これらに従って曹充に改めるべきであろう。曹褒（? 一〇二）は、『後漢書』本傳によれば、字は叔通、魯國薛の人。官は侍中に達した。また「傳禮記四十九篇、教授諸生千餘人、慶氏學遂行於世」と記される。

(16) 自漢末至爲鄭氏學 『後漢書』儒林傳に、「玄本習小戴禮、後以古經校之、取其義長者、故爲鄭氏學」。

(17) 其喪服一篇四句 喪服は、『儀禮』喪服篇のこと。同篇の

賈公彥疏に、「第六明作傳之人、又明作傳之義。傳曰者、不知是誰人所作、人皆云孔子弟子卜商字子夏所爲」とあるのを参照。『經典釋文』はこの篇を喪服經傳と題する。本文に「諸儒多爲注解」というごとく、本志目録には馬融注『喪服經傳』一卷以下、梁・陳の諸家に至る數多くの注釋を載せる。

(18) 自而漢時有李氏得周官至合成六篇奏之 『周禮』に關する記述は、『經典釋文』の記すところに近い。おそらくその説に據ったものであらう。「或曰、河間獻王開獻書之路、時有李氏上周官五篇、失事官一篇、乃購千金不得、取考工記以補之」(序錄)。「鄭云、此篇司空之官也、司空篇亡。漢興、購千金不得。此前世識其事者、記錄以備大數爾」(冬官考工記疏)。もっとも、『禮記』大題の孔疏には、「漢書說河間獻王開獻書之路、得周官有五篇、失其冬官一篇、乃購千金不得、取考工記以補其闕」というが、現行の『漢書』には見えない。あるいは何か他にもとづくところがあったものか。漢志には、「周官經六篇」と著錄される。

(19) 周官蓋周公所制官政之法 『周禮』天官冢宰の鄭注に、「周公居攝而作六典之職、謂之周禮。營邑於土中、七年致政成王、以此禮授之、使居維維、治天下」。

(20) 至王莽時三句 漢志「周官經六篇」の原注に、「王莽時、劉歆置博士」とある。また「經典釋文序錄」に、「王莽時、劉歆爲國師、始建立周官經、以爲周禮」。

(21) 河南綏氏及杜子春受業於歆二句 馬融『周官傳』(『周禮正

- 義』序周禮廢興引」に、「唯歆獨識、其年尚幼、務在廣覽博觀、又多銳精于春秋、末年乃知其周公致太平之迹、迹具在斯奈遭天下倉卒、兵革並起、疾疫喪荒、弟子死喪。徒有里人河南綏氏杜子春尚在、永平之初、年且九十、家于南山、能通其讀、頗識其說。鄭衆、賈逵往受業焉」。また「經典釋文序錄」には、「河南綏氏杜子春、受業於歆、還家以教門徒、好學之士鄭興父子等、多往師之」とある。綏氏は、地名。隋志の著者が「綏氏及杜子春」と、あたかも人名のように扱うのは誤り。
- (22) 是後馬融作周官傳三句 『後漢書』儒林傳の「中興、鄭衆傳周官經、後馬融作周官傳、授鄭玄、玄作周官注」に據ったと思われる。「經典釋文序錄」にも同じ箇所を引いている。馬融と鄭玄注の『周官禮』十二卷は、いずれも本志目録に名が見える。

- (23) 漢初三句 河間獻王の得た書の中に『禮記』があったことは、注(8)に引く『漢書』河間獻王傳に見えている。その顔師古注に、「禮記者、諸儒記禮之說也」という。また漢志には「記百三十一篇」と著録され、班固の原注に「七十子後學者所記也」とある。

- (24) 檢得一百三十篇 『七略』にもとづいた漢志には、注(23)に示されるごとく「記百三十一篇」として著録されており、ここで一篇が減ぜられている根拠は定かでない。

- (25) 明堂陰陽記三十三篇 注(40)参照。
- (26) 孔子三朝記七篇 漢志は、この書を禮家でなく、論語家中

に著録する。『藝文類聚』卷五十五雜文部經典に劉向『七略』を引いて、「孔子三見哀公、作三朝記七篇、今在大戴禮」という。

- (27) 王史氏記二十一篇 漢志に著録される。その原注は、「七十子後學者」といい、顔師古注は、「劉向別錄云、六國時人也」という。また注(40)参照。「王史氏記」は、もと「王氏史氏記」に作るが、底本が錢大昕『廿二史考異』の説により正すのに従う。

- (28) 樂記二十三篇 漢志では樂家に著録される。二十三篇の内譯は、樂記の正義が劉向『七略別錄』にもとづいて記すところによれば、樂本第一、樂論第二、樂施第三、樂言第四、樂禮第五、樂情第六、樂化第七、樂象第八、賓牟賈第九、師乙第十、魏文侯第十一、奏樂第十二、樂器第十三、樂作第十四、意始第十五、樂穆第十六、說律第十七、季札第十八、樂道第十九、樂義第二十、昭本第二十一、昭頌第二十二、賈公第二十三。うち第十一篇までが、現在の『禮記』樂記に採られている。

- (29) 合二百十四篇 『別錄』（『經典釋文序錄』引）に、「古文記二百四篇」といい、「經典釋文序錄」も「周禮論序云」として、「古禮二百四篇」といつており（注(40)参照）、隋志が二百十四篇とするのと合わない。『別錄』は「古文記」の上下二篇にわたる章などを一つに敷えた結果、こうした数になったのだろうか。

(30) 自戴德刪其煩重至又爲之注 鄭玄「六藝論」(『禮記』大題正義引)に、「今禮行於世者、戴德・戴聖之學也」、また「戴德傳記八十五篇、則大戴禮是也。戴聖傳禮四十九篇、則此禮記是也。大戴禮・小戴禮の成立に關する隋志の説は、「經典釋文序錄」に據るところが大きいように思われる。曰く、「周禮論序云、戴德刪古禮二百四篇爲八十五篇、謂之大戴禮、戴聖刪大戴禮爲四十九篇、是爲小戴禮。後漢馬融・盧植考諸家同異、附戴聖篇章、去其繁重及所敘略而行於世、即今之禮記是也。鄭玄亦依盧馬之本而注焉。」錢大昕『廿二史考異』卷七は、「周禮論」を晉の陳邵の『周禮評』(隋志目錄では「周官禮異同評」であらうとし、それに根據を置く陸德明や隋志の見解を次のように批判する。「隋志謂月令・明堂位・樂記三篇、爲馬融所足。蓋以明堂陰陽三十三篇・樂記二十三篇別見藝文志、故疑爲東漢人附益、不知劉向別錄已有四十九篇矣。月令三篇、小戴入之禮記、而明堂陰陽與樂記仍各自爲書、亦猶三年問出於荀子、中庸・緇衣出於子思子、其本書無妨單行也。記本七十子之徒所作、後人通儒各有損益、河間獻王得之、大小戴各傳其學、鄭氏六藝論言之當矣。謂大戴刪古禮二百四篇爲八十五篇、小戴又刪爲四十九篇、其說始於晉司空長史陳邵、而陸德明引之、隋志又附益之、然漢書無其事、不足信也。」

(31) 唯鄭注立於國學三句 「經典釋文序錄」に、「後漢、三禮皆立博士、今慶氏曲臺久亡、大戴無傳學者。唯鄭注周禮・儀禮・禮記、並列學官、而喪服一篇、又別行於世。今三禮俱以

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

鄭爲主」。

樂

樂者、先王所以致神祇、和邦國、諧萬姓、安賓客、悅遠人、所從來久矣。周人存六代之樂、曰雲門・咸池・大韶・大夏・大護・大武。其後衰微崩壞、及秦而頓滅。漢初、制氏雖紀其鏗鏘鼓舞、而不能通其義。其後寶公・河間獻王・常山王・張禹、咸獻樂書。魏・晉已後、雖加損益、去正轉遠、事在聲樂志。今錄其見書、以補樂章之闕。

樂とは、先王が天と地の神々をまねきよせ、諸國の關係をやわらげ、萬民の氣持ちをなごやかにし、賓客をくつろがせ、遠國の人々の心をよころこぼせるでたてであって、その由來ははるか昔にさかのぼる。周の人々は六つの王朝の音楽を保存していたが、それは雲門・咸池・大韶・大夏・大護・大武といった。そののちはすたれて形がくずれ、秦にはいるとぷつぷつ減びてしまった。漢の初め、樂官の制氏が演奏や歌舞の技術を傳えてはいたものの、樂の意味内容

についてはわからなくなっていた。のちに竇公・河間獻王・常山王・張禹（常山の王禹）らが、こぞって『樂書』を天子に献上した。魏晉以後、手を加えられることはあつても、いよいよ正統から遠ざかるばかりであり、それについては「聲樂志」（『音樂志』）に記載がある。ここには現存する書物を著録して、樂の典籍の闕如を補うこととする。

- (1) 自樂者至所從來久矣 『周禮』春官大司樂に、「以六律六同五聲八音六舞、大合樂以致鬼神示、以和邦國、以諧萬民、以安賓客、以說遠人、以作動物」とある。『隋書』音樂志には、音樂の効用を説いて、「其用之也、動天地、感鬼神、格祖考、諧邦國」と、ことと似た表現が用いられている。
- (2) 周人存六代之樂二句 『周禮』春官大司樂に、「以樂舞教國子、舞雲門大卷・大咸・大磬・大夏・大濩・大武」とあり、鄭注に、「此周所存六代之樂。黃帝曰雲門大卷、黃帝能成名萬物以明民其財、言其德如雲之所出、民得以有族類。大咸、咸池、堯樂也。堯能殫均刑法以儀民、言其德無所不施。大磬（韶）、舜樂也。言其德能紹堯之道也。大夏、禹樂也。禹治水傅土、言其德能大中國也。大濩、湯樂也。湯以寬治民而除其邪、言其德能使天下得其所也。大武、武王樂也。武王伐紂以除其害、言其德能成武功」という。

(3) 其後衰微崩壞二句 漢志に、「孔子曰、安上治民、莫善於

禮、移風易俗、莫善於樂。二者相與並行、周衰俱壞。樂尤微眇、以音律爲節、又爲鄭衛所亂、故無遺法」。また『宋書』樂志には、「及秦焚典籍、樂經用亡」という。

- (4) 漢初三句 漢志の「漢興、制氏以雅樂聲律、世在樂官、頗能紀其鏗鏘鼓舞、而不能言其義」にもとづく。『漢書』禮樂志にもほとんど同じ記述があり、同所の服虔注は制氏について、「魯人也、善樂事也」という。

(5) 竇公 漢志に、「六國之君、魏文侯最爲好古、孝文時得其樂人竇公、獻其書、乃周官大宗伯之大司樂章也」。その顔師古注には、「桓譚新論云、竇公年百八十歲、兩目皆盲。文帝奇之、問曰、何因至此。對曰、臣年十三失明、父母哀其不及衆技、教鼓琴、臣導引、無所服餌」とある。

- (6) 河間獻王 漢志に、「武帝時、河間獻王好儒、與毛生等共采周官及諸子言樂事者、以作樂記、獻八佾之舞、與制氏不相遠」。また禮樂志にも王が雅樂を獻じたことについて、「是時、河間獻王有雅材、亦以爲治道非禮樂不成、因獻所集雅樂。天子下大樂官、常存肄之、歲時以備數、然不常御、常御及郊廟、皆非雅聲」と記している。

(7) 常山王張禹 常山王には、景帝の末子常山憲王舜あるいはその嗣子勃の二人があるが、樂書を獻じたという事跡は不明。また張禹なる人物は『漢書』中に二人見える。その一は、卷八十一の河内軹の張禹字は子文で、成帝の師となった人。その二は、卷八十八儒林傳の清河の張禹字は長子で、『左傳』

を傳えた人とされるが、兩人とも樂とのかわりについては全く言及されていない。案ずるに、この一句には隋志の著者の事實誤認があり、「張」一字を衍字とみて、「常山の王禹」なる人物のこととして讀むべきであらう。漢志に、「其（引用者注、謂河間獻王也）内史丞王定傳之、以授常山王禹。禹成帝時爲謁者、數言其義、獻二十四卷記。劉向校書、得樂記二十三篇、與禹不同、其道審以益微」とあり、同目錄に「王禹記二十四篇」を録する。また禮樂志には、「至成帝時、謁者常山王禹世受河間樂、能說其義、其弟子宋韋等上書言之、下大夫博士平當等考試云云」という。

(8) 聲樂志 正しくは音樂志とあるべきところ。『隋書』卷十三から十五に至る三卷を占める。なお、そこに引かれる沈約の梁武帝への奏答に、「向別錄有樂歌詩四篇、趙氏雅琴七篇、師氏雅琴七篇、龍氏雅琴百六篇、唯此而已。晉中經簿、無復樂書、別錄所載、已復亡逸」とあって、魏の鄭默の『魏中經簿』及びそれに因った晉の荀勗の『晉中經簿』には、樂類は設けられていなかったことが推測できる。

春秋

春秋者、魯史策書之名。⁽²⁾昔成周微弱、典章淪廢、魯以周公之故、遺制尙存。仲尼因其舊史、裁而正之、或婉而成章、

隋書經籍志序譯注(一) (興膳・川合)

以存大順、或直書其事、以示首惡。故有求名而亡、欲蓋而彰、亂臣賊子、於是大懼。其所褒貶、不可具書、皆口授弟子。弟子退而異說、左丘明恐失其真、乃爲之傳。遭秦滅學、口說尙存。漢初、有公羊・穀梁・鄒氏・夾氏、四家並行。王莽之亂、鄒氏無師、夾氏亡。

初齊人胡毋子都、傳公羊春秋、授東海嬴公。⁽⁸⁾嬴公授東海孟卿、⁽⁹⁾孟卿授魯人眭孟、⁽¹⁰⁾眭孟授東海嚴彭祖・魯人顏安樂。⁽¹¹⁾故後漢公羊有嚴氏・顏氏之學、與穀梁三家並立。漢末、何休又作公羊解說。⁽¹²⁾

而左氏、漢初出於張蒼之家、本無傳者。至文帝時、梁太傅賈誼爲訓詁、授趙人貫公。其後劉歆典校經籍、考而正之、欲立於學、諸儒莫應。至建武中、尙書令韓詵請立而未行。⁽¹³⁾時陳元最明左傳、又上書訟之。於是乃以魏郡李封爲左氏博士。後羣儒蔽固者、數廷爭之。及封卒、遂罷。然諸儒傳左氏者甚衆。永平中、能爲左氏者、擢高第爲講郎、其後賈逵・服虔並爲訓解。至魏、遂行於世。晉時、杜預又爲經傳集解。⁽¹⁴⁾穀梁范甯注、公羊何休注、左氏服虔・杜預注、俱立國學。然公羊・穀梁、但試讀文、而不能通其義。後學三傳通講、而

⁸⁰⁾ 左氏唯傳服義。至隋、杜氏盛行、服義及公羊・穀梁浸微、今殆無師說。

『春秋』とは、魯の史官が大事を書きしるした書物の名前である。むかし周王朝の力がおとろえ、文物制度が荒廢した頃、魯の國は周公の因縁で、過去の制度がまだのこっていた。孔子は古い史官の記録にもとづいて、編成しなおし、或るときは婉曲かつ文彩ある表現によって、あるべき秩序をあらわしたり、また或るときは事實をじかに書きつけることによって、惡事の大本をあきらかにしたりした。そのため名聲を求めていたのに記載されなかったり、惡名を隱蔽しようとしたのにあらわに書かれたりした者がでて、國や家を亂す臣下や子弟は、不安に驅りたてられた。その褒貶の對象は、具體的には書きしるせないで、口頭で弟子たちに傳えた。弟子たちは孔子のもとからひきざがるとそれぞれに説をなしたので、左丘明は眞實の意を失なってしまうことを案じ、この書のために『傳』を著わした。秦の學術破壊をこうむっても、口傳はなお存続した。漢の初

め、公羊・穀梁・鄒氏・夾氏の四家の傳があり、そろって世に行なわれた。王莽の亂には、鄒氏傳は教授する者がなく、夾氏傳はほろんだ。

それより先、齊の人胡毋子都は、『公羊春秋』をうけつぎ、東海の人嬴公に傳授した。嬴公は東海の孟卿に傳授し、孟卿は魯の眭孟^{すいもう}に傳授し、眭孟は東海の嚴彭祖と魯の顏安樂に傳授した。そこで後漢の公羊學には嚴氏と顏氏の學派があり、それと穀梁學との三學派が國學にとりたてられた。後漢のおわり、何休がさらに『公羊解詁^{げこ}』を著わした。

さて『左氏傳』は、漢の初めに張蒼の家から世にあらわれたが、もともとこれを傳承する者がいなかった。文帝の時になると、梁王の太傅であつた賈誼が訓詁を作つて、趙の人貫公に傳授した。そのち劉歆が經典を調査した際、考證して誤りを正し、國學の講座に加えようとしたのだが、學者たちは賛成しなかった。建武年間に入つて、尙書令の韓詡が國學にとりたててることを願ひでたが實現されなかった。當時陳元がもっとも『左氏傳』にくわしく、彼も請願の文書をたてまつた。そこでやつと魏郡の李封が左氏傳

士に任ぜられることとなった。そののちも頭の固い學者どもが、何度も宮中でひきおろしの論争を繰りかえした。李封が死ぬと、左氏博士はそのまま廢止された。しかし學者の中には『左氏傳』をうけつづける者が極めて多かった。永平年間に、『左氏傳』を得意とする者は、成績優秀と認定されて講義係に任ぜられた。のちに賈逵と服虔が、それぞれ解釋を書きあらわした。かくて魏に入ると、世に行なわれるようになった。晉の時に、杜預がさらに『經傳集解』を著わした。『穀梁傳』の范甯の注、『公羊傳』の何休の注そして『左氏傳』の服虔の注と杜預の注が、みな國學の科目にとりたてられた。しかし『公羊傳』と『穀梁傳』は單に文章の素讀につとめるだけで、その意味内容に通達することはできなかった。後の世の學者は三つの傳をいっしょに講義したが、『左氏傳』は服虔の解釋だけをうけつたえた。隋に入ると、杜氏の注が流行し、服虔の解釋と『公羊傳』・『穀梁傳』はしだいにすたれていき、今日ではほとんど祖述される學説がなくなった。

(1) 春秋者二句 杜預「春秋左氏傳序」(以下杜預序と略す)

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川倉)

に、「春秋者、魯史記之名也」とある。「魯史策書」も杜預のことば、注(2)参照。

(2) 自昔成周微弱至裁而正之 この前後はほぼ漢志と杜預序に據って書かれている。漢志に、「周室既微、載籍殘缺、仲尼思存前聖之業、乃稱曰……以魯周公之國、禮文備物、史官有法、故與左丘明觀其史記、據行事、仍人道、因興以立功、就敗以成罰、假日月以定曆數、藉朝聘以正禮樂」ただし、漢志が左丘明を『春秋』編纂の協力者として記している點(『經典釋文序錄』も同じ)は、隋志と異なる。また杜預序には、「周德既衰、官失其守。上之人不能使春秋昭明、赴告策書、諸所記注、多違舊章。仲尼因魯史策書成文、考其眞僞、而志其典禮、上以遵周公之遺制、下以明將來之法。其教之所存、文之所害、則刊而正之、以示勸戒。其餘則皆即用舊史。史有文質、辭有詳略、不必改也」とある。

(3) 或婉而成章四句 杜預序に、「故發傳之體有三、而爲例之情有五。……三曰、婉而成章。曲從義訓、以示大順。諸所諱辟、壁假許田之類是也。四曰、盡而不汙。直書其事、具文見意。丹楹刻桷、天王求車、齊侯獻捷之類是也。」「婉而成章」は「盡而不汙」などとともに、もと『左傳』成公十四年のことば。「大順」は、『禮記』月令に、「大順者、所以養生送死事鬼神之常也。」「首惡」の例は、『公羊傳』僖公二年に、「虞師晉師滅夏陽。虞、微國也、曷爲序乎大國之上。使虞首惡也」などと見え、『史記』太史公自序にも、「爲人君父而

不通於春秋之義者、必蒙首惡之名」とある。

- (4) 故有求名而亡二句 杜預序に、「五曰、懲惡而勸善。求名而亡、欲蓋而章。書齊豹盜、三叛人名之類是也」。これは『左傳』昭公三十一年の「或求名而不得、或欲蓋而名章、懲不義也」にもとづいている。

- (5) 亂臣賊子二句 『孟子』滕文公篇下に、「孔子成春秋、而亂臣賊子懼」とある。このことばはのち『史記』孔子世家にも、「春秋之義行、則天下亂臣賊子懼焉」と用いられている。

- (6) 自其所褒貶至乃爲之傳 左丘明の『左傳』撰述の經緯を語る文獻中では、おそらく『史記』十二諸侯年表序が最も古いものに屬するだろう。「七十子之徒口受其傳指、爲有所刺譏褒譏挹損之文辭不可以書見也。魯君子左丘明懼弟子人人異端各安其意、失其眞、故因孔子史記、具論其語、成左氏春秋」。しかし、隋志の記述が直接の據りどころとするのは、やはり漢志だったようである。「有所褒譏貶損、不可書見、口授弟子、弟子退而異言。丘明恐弟子各安其意、以失其眞、故論本事而作傳、明夫子不以空言說經也」。

- (7) 自遭秦滅學至夾氏亡 漢志は、公羊・穀梁・鄭・夾の四家が口説から生じたことを述べていう。「及末世、口説流行、故有公羊・穀梁・鄭・夾之傳。四家之中、公羊・穀梁立於學官、鄭氏無師、夾氏未有書」。また『公羊傳』隱公二年「紀子伯者何、無聞焉爾」の何休注に、「言無聞者、春秋有改周受命之制、孔子畏時遠害、又知秦將燔詩書、其說口授相傳、至漢公

羊氏及弟子胡毋生等、乃始記於竹帛、故有所失也」という。

- 漢志目錄には、『公羊傳』・『穀梁傳』・『鄭氏傳』はそれぞれ十一卷が著録されるが、『夾氏傳』十一卷のみは「有錄無書」(原注)、つまり『七略』中に名は存するが書そのものは傳わらぬとされる。また『鄭氏傳』も、すでに班固のころ「師無し」という状態だったことがわかる。ただ余嘉錫『經典釋文序錄疏證』が夙に指摘しているように、『後漢書』列傳二十六范升傳には次のような記事が見られる。建元四年(二八)正月、尙書令韓詵が費氏易及び左氏春秋のために博士を立てるようにと上疏したのに對し、光武帝は羣臣の考えを問うた。そのときの范升の意見にはいう。「近有司請置京氏易博士、羣下執事、莫能據正。京氏既立、費氏怨望。左氏春秋復以比類、亦希置立。京費已行、次復高氏、春秋之家、又有嚙夾。如今左氏・費氏得置博士、高氏・嚙夾、五經奇異、並復求立、各有所執、乖戾分爭」。これが後漢初期の經學の狀況を正確にふまえているものとすれば、「王莽之亂、鄭氏無師、夾氏亡」という隋志の記述には、多少の斟酌を加える必要があるかもしれない。

- (8) 自初齊人胡毋子都至與穀梁三家並立 この一節に示される公羊家傳授の系統は、基本的に『後漢書』儒林傳のまとめかたに従っている。「前書、齊胡毋子都傳公羊春秋、授東平、公、嬴公授東海孟卿、孟卿授魯人眭孟、眭孟授東海嚴彭祖・魯人顏安樂、彭祖爲春秋嚴氏學、安樂爲春秋顏氏學、又瑕丘

江公傳穀梁春秋、三家皆立博士。

(9) 胡母子都 通稱胡母生、子都是字。齊の人。『史記』『漢書』の儒林傳によれば、公羊家として董仲舒と「同業」で、景帝の時に博士となり、晩年は齊に歸って公羊學を傳えた。

公孫弘は門下の一人。後漢の衛宏は、子夏から胡母生に至る公羊家の學統を次のように記している。「子夏傳與公羊高、高傳與其子平、平傳與其子地、地傳與其子敢、敢傳與其子壽、至漢景帝時、壽乃共弟子齊人胡母子都、著於竹帛」(『公羊傳』何休序疏所引)。すなわち胡母生は、それまで長らく口説によつて傳えられていた『公羊傳』を、はじめて竹帛に記すという重要な役割を演じたことになる。何休の説もほぼ同様であること、注(7)参照。また何休の「公羊解詁序」によれば、古くは『胡母生條例』なる書が存したという。

(10) 嬴公 隋志は東海の人とするが、『漢書』『後漢書』儒林傳がともに東平の人とするのに従うべきであろう。注(8)参照。『漢書』儒林傳では、胡母生の門下中で「唯嬴公守學不失師法」と稱され、昭帝の諫大夫となった。ただ、鄭玄「六藝論」(『公羊傳』何休序疏所引)は、嬴公を胡母生ではなく董仲舒の弟子とする。

(11) 孟卿 『漢書』儒林傳に名が見えるが、傳は未詳。春秋學の他に禮も治めた。禮類注(3)参照。

(12) 眭孟 名を弘、字を孟という。魯國著の人。昭帝の時に符節令となったが、災異を説いたことにより誅された。『漢書』

隋書經籍志序譯注(一)(興膳・川合)

卷七十五に傳がある。隋志は『後漢書』儒林傳に倣つて、眭孟を孟卿の門下とするが(注(8)参照)、『漢書』本傳に「從嬴公受春秋」、同儒林傳に「(嬴公)授東海孟卿・魯眭孟」とあり、鄭玄「六藝論」も「嬴公弟子眭孟」と記している。

(13) 嚴彭祖 字は公子、東海下邳の人。『漢書』儒林傳によれば、眭孟の弟子百餘人のうち、顔安樂と並んで最もすぐれ、師に「春秋之意、在二子矣」と稱されたという。宣帝の博士となり、のち太子太傅に至った。門下から王中が出ている。

(14) 顔安樂 字は公孫、魯國薛の人。眭孟の姉の子。官は齊郡の太守丞に至ったが、のち仇家のために殺された。門下から冷豐・任公の二家が出ている。『漢書』儒林傳に名が見える。

(15) 與穀梁三家並立 隋志は春秋三傳のうちの『穀梁傳』についてほとんど言及していない。『漢書』儒林傳によれば、初期の穀梁學者には武帝時代の江公があったが、公羊派の董仲舒に壓倒されて振わなかった。宣帝の世になって、帝が穀梁學を好んだところから、江公の孫を召してはじめて博士に立てた。宣帝治世末期の甘露元年(前五三)、公羊博士嚴彭祖らの公羊派と穀梁議郎尹更らの穀梁派(その中には劉向を含む)との間で、三十餘事をめぐっての討論が行われ、穀梁派が公羊派を壓倒したため、それ以來穀梁の學が大いに榮えたという。

(16) 漢末二句 何休(一二九—一八二)、字は邵公、任城樊の人。『後漢書』儒林傳によれば、六經に精通して、世儒に及

ぶ者なしと稱された。はじめ郎中となったが、病氣のため辭任、のち太傅陳蕃に招かれて再び政事に參與したが、黨錮の禍に坐して追放された。爾來、『公羊傳』の研究に没頭すること十七年、『公羊春秋解詁』を著わした。隋志本文に「解説」とあるのはもとより誤り。目錄では「解詁」に作っている。何休にはその他に『春秋公羊墨守』十四卷、『春秋左氏膏肓』十卷、『春秋穀梁廢疾』三卷の著書があった。

(17) 左氏漢初出於張蒼之家二句 『說文解字』序に、「又北平侯張蒼獻春秋左氏傳」とある。『左傳』序の疏に引く劉向

『別錄』は、『左傳』傳授の系譜を述べていう。「左丘明授曾申、申授吳起、起授其子期、期授楚人鐸椒、鐸椒作抄撮八卷、授虞卿、虞卿作抄撮九卷、授荀卿、荀卿授張蒼」。『經典釋文序錄』はこれを承けて、さらに張蒼から賈誼に伝えられたという。『漢書』儒林傳には、「漢興、北平侯張蒼及梁太傅賈誼・京兆尹張敞・太中大夫劉公子皆修春秋左氏傳」とある。

(18) 至文帝時三句 『漢書』儒林傳に、「誼爲左氏傳訓故、授趙人賁公、爲河間獻王博士」。班固はさらに賁公以後の傳授についても記しているが、『後漢書』儒林傳では、前漢における『左傳』傳授の系譜を賈誼から賁公に至るところでとどめている。

(19) 其後劉歆典校經籍四句 『漢書』卷三十六劉歆傳に、「及歆校祕書、見古文春秋左氏傳、歆大好之。時丞相史尹咸以能治左氏、與歆共校經傳。歆略從咸及丞相翟方進受、質問大義。

初左氏傳多古字古言、學者傳訓故而已。及歆治左氏、引傳文以解經、轉相發明、由是章句義理備焉。……及歆親近、欲建立左氏春秋及毛詩・逸禮・古文尚書、皆列於學官。哀帝令歆與五經博士講論其義、諸博士或不肯置對、歆因移書太常博士、責讓之曰云云。

(20) 自至建武中至遂罷 『後漢書』儒林傳の「建武中、鄭興・陳元傳春秋左氏學。時尚書令韓詡上疏、欲爲左氏立博士、范升與詡爭之未決、陳元上書訟左氏、遂以魏郡李封爲左氏博士。後羣儒蔽固者、數廷爭之。及封卒、光武重違衆議、而因不復補」に據って書かれている。韓詡の上疏に關しては、『後漢書』范升傳に詳しい記述が見える。注(7)參照。

(21) 陳元 字は長孫、蒼梧廣信の人。父の欽は、劉歆と同時代の左氏學者で、王莽の師でもあった。陳元は父に従って『左傳』を學び、桓譚・杜林・鄭興らとともに、後漢初期の學界に重きをなした。彼が范升到に反駁して『左傳』を立てられるよう乞うた上疏は、『後漢書』列傳二十六の本傳に收められている。同傳によれば、その後も上疏をくり返して范升到に辯難すること十餘たび、ついに光武帝をして一たん左氏學を立てさせることに成功した。

(22) 諸儒傳左氏者甚衆 杜預序に、「古今言左氏春秋者多矣、今其遺文可見者十餘家」という。

(23) 永平中三句 『後漢書』儒林傳に、「建初中、大會諸儒於白虎觀、考詳同異、連月乃罷。肅宗親臨稱制、如石渠故事、

顧命史臣、著爲通義。又詔高才生受古文尚書、毛詩、穀梁、左氏春秋、雖不立學官、然皆擢高第爲講師、給事近署、所以網羅遺逸、博存衆家」とある。隋志は明帝の永平年間（五八—七五）の事實として記すが、『後漢書』によれば、一代のちの章帝の建初年間（七六—八四）のことに屬する。

(24) 賈逵 隋志目錄に、『春秋左氏長經』二十卷、『春秋左氏解詁』三十卷が著録されている。賈逵は讖緯說と關連づけることによって、『左傳』の他の二傳に對する優位を説き、章帝に認められた。書類注(26)參照。

(25) 服虔 字は子慎、河南滎陽の人。官は中平年間（一八四—一八九）の末に九江太守に至った。『後漢書』儒林傳に、「作春秋左氏傳解、行之至今」とあり、隋志目錄には、『春秋左氏傳解詁』三十一卷と著録される。他に『春秋左氏膏肓釋痾』十卷等の著述があった。

(26) 杜預 (二二—二八四)、字は元凱、京兆杜陵の人。鎮南大將軍として、吳討伐を指揮したことは有名。『晉書』卷三十四本傳に、「既立功之後、從容無事、乃耽思經籍、爲春秋左氏經傳集解」という。隋志目錄に、『春秋左氏經傳集解』三十卷を著録する。他に『春秋釋例』十五卷、『春秋左氏傳評』二卷を著わした。

(27) 范甯 字は武子。四世紀半ばの東晉の人。官位は中書侍郎に至ったが、晩年は官職を免ぜられて家に在り、六十三歳で沒した。『晉書』卷七十五本傳に、「甯以春秋穀梁氏未有善

解、遂沈思積年、爲之集解。其義精密、爲世所重」とある。隋志目錄には、『春秋穀梁傳』十二卷のほか、『春秋穀梁傳例』一卷を著録する。

(28) 俱立國學 晉の國學における三傳の位置に關しては、ここに記されている以外にはあまり資料を得ないが、ただ東晉初期の賀循は上疏して次のようにいつている。「春秋三傳、俱出聖人、而義歸不同、自前代通儒、未有能通得失、兼而學之者也。況今學義甚煩、不可令一人總之。今宜周禮・儀禮・二經、置博士二人、春秋三傳置博士三人、其餘則經置一人、合八人」（『通典』卷五十三所引）。また東晉の太興（三一—三八—三二）初めに國學の設立を議したときの計畫には、『左傳』杜氏・服氏に各一人博士を置くこととされていて、それに對して荀崧が『公羊傳』『穀梁傳』にも博士を置くことを提言した記事が、『宋書』禮志一・『通典』卷五十三に載せられている。易類注(30)參照。

(29) 後學三傳通講 『晉書』儒林傳には、『春秋』三傳を兼ね修めた學者のことがまゝ見える。まず劉兆傳には、「以春秋一經而三家殊塗、諸儒是非之議紛然、互爲讐敵、乃思三家之異、合而通之。周禮有調人之官、作春秋調人七萬餘言、皆論其首尾、使大義無乖、時有不合者、舉其長短以通之。又爲春秋左氏解、名曰全綜、公羊・穀梁解詁皆納經傳中、朱書以別之」とある。隋志目錄には、劉兆の『春秋公羊穀梁傳』十二卷が著録されている。また范毓は、「合三傳、爲之解注、撰

春秋釋疑」といわれ、范隆は「春秋三傳を著」わして、「甚有條義」と評され、董景道も、『春秋』三傳等の書に明るく、「大義を精究」したと稱される。以て晉における春秋學の風氣を窺うに足ろう。ただし隋志のいう「後學」とは、晉以降の人をも含むと考えるべきだろう。

- (30) 左氏唯傳服義 これは注例に見るような北朝の學を意識していったものらしく、南朝の狀況は少しく異なっていたことが、『梁書』儒林傳の崔靈恩傳などからうかがえる。「靈恩先習左傳服解、不爲江東所行、及改說杜義、每文句常申服以難杜、遂著左氏條例以明之。時有助教虞僧誕又精杜學、因作申杜難服、以答靈恩、世並行焉」。

- (31) 自至隋至今殆無師說 『魏書』儒林傳に、「虔左氏春秋、休公羊傳、大行於河北」といい、また「晉世杜預注左氏、預玄孫坦、坦弟驥、於劉義隆世、並爲青州刺史、故齊地多習之」とあるのが、北朝における春秋學の狀況を窺う記事として参考になろう。また『北史』儒林傳には次のようにいう。

「河北諸儒能通春秋者、並服子慎所注、亦出徐生之門。張買奴・馬敬德・邢峙・張思伯・張彫・劉畫・鮑長宣・王元則並得服氏之精微。又有儒覬・陳達・潘叔度、雖不傳徐氏之門、亦爲通解。又有姚文安・秦道靜、初亦學服氏、後更兼講杜元凱所注。其河外儒生、俱伏膺杜氏。其公羊・穀梁二傳、儒者多不措懷」。

譯注者後記

今回も前回と同じく、譯は川合が、注は興膳が擔當した。譯注の草稿を參考資料として提供された岡本不二明、中村哲男の兩君に謝意を表する。